様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：４５４１１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１１４５

研究課題名（和文）実践知の創造を支援するワークショップのアクションリサーチ

研究課題名（英文）Action research as a path to adaptive expertise of workshops

研究代表者
廿日出　里美（HATSUKADE, SATOMI）

安田女子短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：４０２４８３２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円、（間接経費）　　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：Ｙ．エンゲストロームの活動理論を援用しながら開発した一連のワークショップの企画と運営を通して、「実践のなかでの創造」に寄与するワークプログラムのデータ収集と研究協力者であるアーティストとの共同カンファレンスにおけるデータセッションを繰り返し、研修を行う主催者・参加者のニーズとワークショップで提供される知の体系を関連づけなら緻密に整理している。各ワークショップの企画趣旨は研究代表者個人の見解によるものであり、所属機関とは無関係である。

研究成果の概要（英文）：The planning and organization of a series of workshops are developed using the activity theory of Y. Engeström. The data session in common conference with the artists who made the data collection and the research partnerships between people in work programs who contributed to "creation in practice" is repeated. The needs of a researcher and participants given training at a workshop are precisely examined in terms of their correlation. The planned meaning of each workshop is based on the individual views of a research representative and is unaffiliated to the author's organization.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：保育者養成　活動理論　ワークショップ　演劇　コンテンポラリー・ダンス　オイリュトミー　専門的知識の提供　専門多職種チーム

１．研究開始当初の背景

「指導案を書けない実習生は受け入れません」「保育者としてとてもやっていけないと思います」「日本語が通じません」「状況に応じた判断ができません」

能力不足，または，指導困難と思われる学生を評して，実習生を受け入れた保育所や幼稚園の先生方から発せられた言葉である。

保育所や幼稚園から「卒業後，即戦力になるよう学校で指導して欲しいです」という要望が保育者養成校に寄せられることも珍しくない。

授業や研修を受ける学習者側の学力，問題設定能力，問題解決能力，社会的スキル，生活経験の未熟さが問題視されればされるほど，その授業や研修にあたる担当者側に高い教育力と実践力が求められる（前川幸子 2013「ケアリングの萌芽を育む対人援助職教育に向けて」平成 25 年度全国保育士養成セミナー分科会Ａ 養成学校の課題と展望〈第 1 分科会〉保育士養成のマネジメント　組織とカリキュラム話題提供　パワーポイント資料）。現場で求められる即戦力の期待に早急に応えようとするあまり，授業や研修を担当する側の権力が一方的に行使されたり，特定の社会集団の実践技術の習得と規範の内面化に学習が矮小化・限定化されたりすることのないように気をつけなければならない。そうした危険を回避しつつ，授業や研修における負の結果要因を学習者の基礎学力やコミュニケーション能力の不足のみに求めるのではなく，個人・チーム・組織のファカルティ・ディベロプメント（ＦＤ）によって克服し，乗り越えていくようなデザインを提唱していきたいと，本研究では考えている。

２．研究の目的

この研究は，平成 20～22 年度科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）「実践知の創造を支援する活動システム理論の構築」（研究代表者：甘日出里美）で導き出された知見を援用し，「異なる現場の往還的な学習」を支援することが求められる保育者・教員養成校の教員，ならびに，実習生・初任者・転任者の研修にあたる保育・教育現場の教員向けに「ワークショップ型研修の手引書」を作成することを目的に計画されたものである。具体的には，学習者が自らの関心と照合させながら，複数人からなる専門多職種チームで必要な実践知を創造していくことができるようなワークショップ型研修のモデルプランを三年計画で編纂する。同時に初年度からモニタリングを開始し，研修担当者の悩みや意見を反映させながら，重要な焦点事例を選別し，手だてとなる外的活動（観察可能な相互作用の動画）と学習を成立させる心的活動（理論的な洞察）の解説を充実させていくことを目標に，実験的な基礎データを得ることを当面のねらいとする（Ｙ．エンゲストローム 2010『変革を生む研修のデザイン』鳳書房）。

３．研究の方法

研究の目的に沿ったワークショップ（以下，WS と記す）を受講者に提供するアーティストとプログラム内容を選定し，年に 1～3 回の割合でそのアーティストを講師として招聘し，保育者を目指す学生や一般の人々を対象にＷＳを開催する。WS 実施の前後はその都度打ち合わせや意見交換を行うが，いったん WS が開始したら，その時間内の進行はアーティスト側に一任する。データセッションでは，ＷＳの様子を映像で振り返り，必要に応じてアーティストや参加者と意見交換を行う。分析では次の 2 点を重視する。

１）専門的な仕事で必要とされる保育・教育の知の体系とＷＳで提供される知の体系とがどのように結びつけられるのか，実践的な帰結をもった動画をもとに，その教授理論の作業仮説を詳らかにする。

２）さまざまな人材育成や職場研修に活用できるよう，学習者集団による違いを考慮した分析を行う。研修のデザインは，学習者集団の特徴と研修の形態により，性質が大きく異なることから，次の表１を分析枠組みに，モニタリングの対象を選定する。

表１ 学習者集団と研修形態によるモニタリングの対象

学習者集団の特徴 研修形態	教育・臨床志向の強い組織	研究志向の強い組織
学校の学び×現場の学び （pre-service teacher education, service leaning）編 実習事前事後指導 実習期間中の指導 等	専門学校 短期大学 四年制大学 等	教職大学院 大学院　等
研修の学び×現場の学び （workplace learning）編 園内研修　校内研修 院内研修　施設内研修　等	児童福祉施設 学校 医療機関 等	実験学校 大学病院 等

４．研究成果

専門的な仕事で必要とされる保育・教育の知がその現場でなく，大学という教育機関で養成されることの意義は，「切実な問題」への対応を矢継ぎ早に迫られる現場からいったん身を退いて，比較的安全な場所で納得がいくまでその問題に向き合うことができることにあろう。それは舞台にあがるための稽古を積むのと似ている。しかし，学習者が本番の舞台，すなわち，保育・教育現場で自分を保ちつつ，周りとの折り合いをつけながら，自分がその場に居合わせる存在価値をどのようにして切り開いていけばよいのか，安全な場所のなかでずっと考え続けるのは困難である。

（１）切実な問題へのアプローチ

そこで，アクションリサーチのとりかかりは，学習者がチームとして何らかの作品づくりに小集団の仲間と期間限定で取り組む際，自然発生的に浮かび上がる当事者の「切実な問題」に気づき，それを他者と共有するよう仕掛けることから始める。そこから初学者では到達できないような「切実な問題」へと意識を成熟させていく役目も研究者の仕事である。「切実な問題」の意識化と共有化は，新しい「身体技法」を獲得する入口になる。そのとき，学習者が誰と出会うのか，学習者に誰と出会わせるのかが次の段階へのリサーチ・デザインとなる。

少なくとも，「指導案を書けない実習生は受け入れません」「保育者としてとてもやっていけないと思います」「日本語が通じません」「状況に応じた判断ができません」等、学習者の能力を全否定する術しか持ち合わせない指導者と学習者を積極的に出会わせたいとは思わない。それに対して，学習者と研究者だけでは解決できないような問題群に対して，独自の方法論と照らし合わせながら，経験知に裏づけられた具体的なディレクションによって，学習者が腑に落ちるまでの理解に導いたり，自身で課題に取り組めるきっかけを授けたりすることのできるアーティストの存在を知るならば，学習者を積極的に出会わせたいと願うのは自然なことであろう。そうした学びをＷＳで提供できるアーティストは限定される。

ＷＳの事後は，ＷＳでの学びが日常生活に深く浸透するように，ＷＳデザインは自由応募や不特定多数の流動的な学習者ではなく，少人数からなるチームでの学びを重視すると同時に，ＷＳをきっかけに，受講者が学んだことをその後も続けて取り組めるよう，第三者に向けた発表の場を必ず，組み合わせるかたちでアクションリサーチを実施している（表２❶～⑬）。

平成 23～25 年度の 3 年間に研究対象の学習者が参加と発表を行った連続的な芸術における学習活動の軌跡は表２のとおりである。これらは貴重な実験データとなる。

表２　参加と発表を行った芸術における学習活動の軌跡（2011～2013 年度）

一年目

2011 年 7 月　公共ホール主催のダンス WS 見学　講師：近藤良平（参加学生：2 人）
2011 年 8 月　大学オープンキャンパスにて劇「ほいくか忍者の修業でござる！」発表❶（参加学生：9 人）
2011 年 9 月　WS「親子でふれあうアートヨガ」実施❷（参加学生：4 人）
　2011 年 11 月　WS≪1 回目≫　講師：きだつよし「リラックスとコミュニケーションⅥ」（参加学生：9 人）
　内容：劇「ほいくか忍者の修業でござる！」の演出的指導
　2011 年 11 月　WS≪2 回目≫　講師：きだつよし「リラックスとコミュニケーションⅦ」（参加学生：9 人）
　内容：劇「“まほう”の贈りもの」の演出的指導
　アートヨガ「みんなでからだほぐし」の演出的指導
2011 年 11 月　保育園児を対象とした劇・アートヨガ WS 発表❸❹（参加学生：9 人
　劇「ほいくか忍者の修業でござる！」
　アートヨガ「みんなでからだほぐし（1 回目）」
　劇“まほう”の贈りもの」
　アートヨガ「みんなでからだほぐし（2 回目）」
2011 年 12 月　卒業研究発表会にて発表❺
　2012 年 3 月　WS≪3 回目≫　講師：ほうほう堂　新鋪美佳　福留麻里「おしゃべりなからだⅠ」（参加学生：3 人）
　内容：関係を築く即興表現

二年目

2012 年 8 月　地域の子どもを対象に WS❻
　2012 年 9 月　WS≪4 回目≫　講師：ほうほう堂　新鋪美佳　福留麻里「おしゃべりなからだⅡ」（参加学生：9 人）
　内容：関係を築く即興表現
　2012 年 9 月　WS≪5 回目≫　講師：きだつよし「リラックスとコミュニケーションⅧ」（参加学生：9 人）
　内容：劇「ふしぎな三にんぐみ」
　ダンスシアター「おもちゃの時間」の演出的指導
2012 年 11 月　地域の子どもを対象に劇とダンスシアター発表❼
　劇「ふしぎな三にんぐみ」
　ダンスシアター「おもちゃの時間」
　保育園児を対象に劇とダンスシアター発表❽
　劇「ふしぎな三人ぐみ」
　ダンスシアター「おもちゃの時間」
2012 年 12 月　卒業研究発表会にて発表❾

三年目

　2013 年 6 月　WS≪6 回目≫　講師：ほうほう堂　福留麻里「おしゃべりなからだⅢ」参加学生：6 人　社会人：1 人）
　内容：関係を築く即興表現
2013 年 8 月　大学オープンキャンパスで劇『MAME・まめ・マメ・豆『マメンホチップ 4 せい』より』を発表❿（参加学生：8 人）
　2011 年 9 月 WS≪7 回目≫　講師：桑原敏郎「はじめてのオイリュトミーⅠ」参加学生：9 人　社会人：5 人
　内容：言葉のオイリュトミーと音楽のオイリュトミーの基礎
2013 年 10 月
　2011 年 10 月 WS≪8 回目≫講師：きだつよし「リラックスとコミュニケーションⅨ」（参加学生：8 人）
　内容：台本の書き方と演技指導
　2011 年 10 月 WS≪9 回目≫講師：きだつよし「リラックスとコミュニケーションⅩ」の参与観察（参加学生：38 人）
　内容：劇「ふしぎなせんたくき」の演出的指導
2013 年 11 月　大学祭にて劇「ふしぎなせんたくき」発表⓫
2013 年 11 月　個人主催「オイリュトミー体験ワークショップ in 広島」講師：鯨井謙太朗
　2011 年 11 月 WS≪10 回目≫講師：きだつよし「リラックスとコミュニケーションⅩⅠ」（参加学生：8 人）
　内容：劇「お・ば・け・や・し・き？」「OBAKE　STORY　いる？いない」の演出的な指導
　2010 年 11 月 WS≪11 回目≫講師：ほうほう堂　新鋪美佳「おしゃべりなからだⅣ」（参加学生：8 人）
　内容：関係を築く即興表現
2013 年 12 月　卒業研究発表会にて発表⓬⓭
　劇「お・ば・け・や・し・き？」
　劇「OBAKE　STORY　いる？　いない？」

注：網かけ部分はアーティストが指導・参加した活動

（２）実験データによる知見と課題

当該科学研究費助成事業への申請は，研究の目的でも述べたように，平成 20～22 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「実践知の創造を支援する活動システム理論の構築」（研究代表者：廿日出里美）を実地に移すために計画し，採択されたものである。過去の研究成果は，『教育社会学研究』（第 88 集，2011 年）に掲載され，その抄録が「愛育ねっと」（厚生労働省助成　子ども家庭福祉情報提供事業）で広く一般に紹介されている。そうした先行研究の理論と方法論を踏襲し，平成 23～25 年度の三年間で，“個々の受講者”に焦点を当てたＷＳを計 11 回にわたって開催し，受講者の身体をとおして実感される知の体系の一端を明らかにすることができた。その

研究成果の一部は日本教育学会第 71 回大会（2012 年 8 月 25 日　於名古屋大学）において「実践知の創造を支援するワークショップのアクションリサーチ―「芸術における学習」を保育者養成に導入する試み」という題目で発表済みである。それらは，平成 20 年度から継続的に積み上げてきた演劇的なワークの成果によるところが大きい。先行研究から合わせて過去 5 年間にわたり，毎年，欠かさず開催した演劇 WS「リラックスとコミュニケーションⅠ～Ⅺ」は，計画・実施すれば，「必ずといってよいほど成果が見込める」研修プログラムに成長・進化を遂げている。演劇ＷＳで学ばれる知の体系は表３のとおりである。アーティストは表にある知の体系をパッケージ化された出来合いの知として一方的に教えるのではなく，学習者の「切実な問題」をその場で受け付け，その場で課題を解決していく際の方法論として用いている。このように，アーティストのなかには，新たな学習活動を産み出す知の体系としての理論をもち，「足りていないものは何か？」「目的地に到達する補助線として何が必要か？」を具体的に示すことのできる卓越者が存在する。WS では参加者のニーズに合わせて，その知が応用され，刷新される。そうした知の体系は，アーティストによって異なる。WS を提供するアーティストごとに知の体系が把握できていれば，WS で何を学んでほしいかをプログラムや対象者毎に，明確な展望をもつことができる。そのためにも，アーティストが実施する WS のフィールドワークは必須である。

表３　演劇ＷＳで学ばれる知の体系

リラックス	○自分を練る　自分を知る　緊張のほぐし方
	体（伸筋　屈筋　体幹　軸　参加の構え）
	心（退く⇔押す　弱⇔強）
コミュニケーション	
	○伝わる
	体（表情など）＋心（イメージ／気持ち／感情）→言葉→伝わる
	言葉と動きの一致
	届く→わかる→感じる
	人をとらえる（軸と面）
	相手に影響する　エネルギー（量と向き）　興味→（集中力）→目的
	同調（体幹をつかった動き　呼吸　目線）
	○やりとり（受けて→届ける）
	情報＋気持ち／気分+呼吸感（情報をもらいながらプランを立てる）
	集中力の分散（同時集中）
	耳で聴く→イメージで聴く（雰囲気そのものを感じ取る）
	○台本の読み方（読解力　想像力　表現力）
	○面白く感じるゾーン（受け手の想像の範疇を超える≠デフォルメ）
その他	○軸でとらえる　枠でとらえる

出典：廿日出（2011）

演劇 WS が絶大なる効果をあげる一方で，保育の実践場面で発揮される“その場”の状況対応力（台本がない場面での振る舞い方）の課題は学習者に残されたままであった。そこで，二年目にあたる平成 24 年度からは，これまでの演劇的なワークを継続して行うとともに，演舞時の知覚（インプロビゼーション）を優先する，“発声”を伴わないコンテンポラリー・ダンスを導入した WS を計画し，実施している。しかしながら保育実践への応用を射程に入れた場合，“発声”の要素を度外視した分析だけでは不十分である。そこで，最終年度にあたる平成 25 年度は，これまでのデータを補填し，それぞれの比較分析を可能にするため，“発声”と身体の“動き”を結びつけたエフェソス・オイリュトミーの理論と実践に造詣が深い専門家の協力を得て新たなプログラムを提供している。これらのプログラムも回数を重ねていけば保育・教育に新たな知見をもたらすワークに発展する可能性が認められる。

最終年度は上の 3 種類のＷＳを組みあわせ，一年間連続する学習活動モデルを提示している。

（２）国内外の保育・教育現場における動向

国内では，平成 24 年 8 月 28 日中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」において，「思考力・判断力・表現力等の育成など新しい学びに対応した指導力」，ならびに，初任段階の教員が困難を抱えていることから「養成段階における実践的指導力の育成強化」等の課題が指摘されている。答申では，教育委員会と大学等との連携・協働による支援を改革の方向性として打ち出しているが，両者は「実践」と「研究」の対立軸のみならず，さまざまな矛盾を内的に孕んでいることを廿日出は明らかにしている（「保育者養成という現場の日常－人々を実践に向かわせる知の再構成－」『教育社会学研究』第 88 集，p. 71）。たとえば，教育委員会と大学との連携・協働による研修プログラムの開発は，学習者側の多忙化に拍車を掛け，当事者の抱える苦悩や疑問の解決がなかなか優先されない傾向にある。保育・教育の専門家とは限らない保育者・教員養成校の教員は「保育・教育職に就く準備としての事前学習」や「実践を持ち帰っての省察」を得意としているものの，「実践のなかでの創造」に寄与することは苦手としていることが多い。また，保育士養成においては，保育士不足解消のため，養成施設の急増や保育士養成コースの新設に

伴い，教員の確保が課題となっており，組織全体としての質的低下がおおいに懸念される（廿日出他，2014）。

国外では，1991 年にニューズウィーク誌で世界のベストスクールとしてイタリアレッジョエミリア市の幼児学校が紹介されたのを契機に「アート教育」に注目が集まり，伝統的な学びとは質的に異なる新しい学びに関心が向けられている。ドイツでは，ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と社会的に底辺に置かれている250人の子どもたちとの「ダンス・プロジェクト」が 2003 年から継続的に実施されたり，ヴッパタール舞踊団ピナ・バウシュ「コンタクトホーフ」を 10 代の子どもたち 40 人が踊るレッスンが 2008 年に開始されたりするなど，優れたアーティストがファシリテーターとして教育活動に参加している。国内でも，1990 年代後半以降，公共ホールを中心に，アーティストを地域の学校や福祉施設に派遣してＷＳなどの事業を手掛ける「アウトリーチ」が普及している。教育機関では，2005 年から大阪大学では高度な専門性をもった理系学生に職場で必要な最低限のコミュニケーション能力をつけることを目的とした「医療者・技術者向け対話ＷＳ」や「演劇ＷＳ」が，2008 年から東京工業大学では講師を海外から招聘しての文明科目「ダンスシアターＷＳ」が導入されている。以上のような国内外の動向を踏まえ，研究の成果から導き出される提言は次のとおりである。

１）公共ホールが提供するプログラムを学校や福祉施設で受け入れるだけではものたりない。アウトリーチの目的は，文化・芸術を地域に広く普及させ，地域における公立文化施設の役割の拡大させることにある。そうした政策的な要請ではなく，学校・施設側，ならびに，学習者側のニーズを反映させたワークショップ型研修を医療や芸術など多様な分野の専門家と提携して行う必要がある。

２）過去 5 年間に手掛けたワークのなかには，計画・実施すれば，「必ずといってよいほど成果が見込める」研修プログラムに成長・進化を遂げたメニューが存在する。しかし，その恩恵を受けることのできる学習者は，一度に多人数の受入れが可能な講演会や講義と異なり，特定の場所で実際にワークを体験したごく僅かな少人数に限られ，「エソテリック(esoteric)」な領域に留まっている。それを個人レベルで人と人が出会える範囲を超えた影響力やチーム・組織全体への改善につなげるため，「エクサテリック(exoteric)」な（部外者でも理解できる）教材を作成していくことが今後の課題である。そのために専門職種を積極的に活用したモニタリングを重視するとともに，汎用性の高い手引きの編纂を目指す必要がある。

（３）アクションリサーチとコミュニティ

研究の本質と乖離したところで当該研究は，専門的知識の提供への謝金支払いの事務手続きをめぐり，次のような理由から滞りが生じている。以下，不定期に起こる起案書の不決裁とその理由を抜粋する。

・2011 年 10 月　不決裁の理由：専門的知識の提供者の居住地（関東である）　謝金額ＷＳの案内（一般公募の受講者でない）　対象者（10 名以下の少人数である）　文章（もう少し詳細がわかるように）
・2012 年 2 月　不決裁の理由：打ち合わせ時に発生する専門的知識の提供（謝金の適用は認められない）
・2013 年 5 月　不決裁の理由：専門的知識の提供者への謝金の妥当性　参加学生への謝金（支払われないのは問題がある）　文章（長い）

制度上の問題も含め，組織レベルの変革や改革への要求がアクションリサーチを遂行に埋め込まれている。そこでどのような軋轢が生まれ，どのように処理されたのか記録しておくことは，アクションリサーチを通じてコミュニティにどう関与しているか俯瞰してみる貴重な資源となる。思いも寄らぬ対照を得た結果，浮き彫りにされた当該研究の立場は次のとおりである。

１）当該研究におけるＷＳの位置づけ

当該研究ではＷＳを“研究の開発手法”として戦略的に用いている。ＷＳの受講者は，保育・教育系の短期大学・大学の学生 10 人程度を想定している。アクションリサーチとしてＷＳを行うので，当該研究の目的に沿った追跡調査と分析が可能になるよう，受講者は予め統制しておく必要がある。そこで，当該研究ではＷＳの受講者数を受講者と講師の間で互いに名前と顔が一致する 10～20 人前後，多くても 40 人以下に限定する。民間団体や公共ホールが企画する身体を使ったＷＳにおいても，受講者数は 10 人前後が一般的であり，最大でも 20 人を定員にしているプログラムが主流である。当該研究は“共同で作品づくりをすすめていくことが期待されている成員間の関係性”に着目し，追跡的な調査を行う。当該研究で扱うＷＳは，いわゆる不特定多数を相手に行う“啓蒙的な活動”とは全く異なる

（したがって，一般への受講者公募の案内等は行わない）。

２）専門的知識の提供者の選考

当該研究の優先課題は，子どもが対象となるサービスの職業人に求められる「知」の再構成に，どのような理論的関与が貢献できるか，ＷＳでアーティスト（専門的知識の提供者）と受講者が織りなす相互行為の分析をとおして明らかにしていくことにある。アーティストがＷＳのなかで運用する実践知は当該研究の鍵を握るだいじな部分なので，事前のフィールドワークをもとにＷＳで提供される知の体系をアーティスト毎に再構成し，精査したうえで，専門的知識の提供者を選考している（誰でもよいというわけではない）。

３）専門的知識の提供への謝金

当該研究にかかる「専門的知識」とは，充分な準備を整えたうえで「研究代表者が企画するＷＳで専門的知識の提供者（アーティスト）が運用する専門的知識」ならびにＷＳで観察された一連の相互行為を記述・映像・音声記録に残し，データ化したものをもとに開催する「データセッションで専門的知識の提供者（アーティスト）が意識化・言語化する専門的知識」の両方を含んでいる。したがって，当該研究における「専門的知識の提供への謝金」は，単発的に行われる講演やＷＳ指導の対価として支払う単なる「講師料」とは性質を異にする。付け加えるまでもないが，ＷＳにかかる研究代表者への謝金は，発生するはずもなく，そうした発想は微塵も持ち合わせていない。また，「受講者への謝礼がない」ことを理由に事務手続きが凍結されることに対しては，「切実な問題」の解決以外に別の動機が受講者に生じる恐れがあることを考慮し，支払わない選択をするという返答を用意したい。

なお，研究代表者は所属機関が実施する平成 23～25 年度科学研究費助成事業研究費執行内容のモニタリング（旅費・謝金のヒアリング）に全て応じたうえで当該研究を行っている。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔報告書〕（計１件）

①<u>廿日出里美</u>，矢藤誠慈郎，倉掛秀人，前川幸子他，分科会Ａ 養成学校の課題と展望〈第１分科会〉保育士養成のマネジメント組織とカリキュラム，全国保育士養成セミナー報告書　平成 25 年度，一般社団法人全国保育士養成協議会，2014，100-110 頁

〔学会発表〕（計１件）

①<u>廿日出里美</u>，実践知の創造を支援するワークショップのアクションリサーチ―「芸術における学習」を保育者養成に導入する試み，日本教育学会第 71 回大会，2012 年 8 月 25 日，於ける名古屋大学

〔ワークショップおよびデータセッションの企画と開催〕（計 11 件）

②<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　リラックスとコミュニケーションⅥ（講師：きだつよし），2011 年 11 月 2 日，於安田女子短期大学

③<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　リラックスとコミュニケーションⅦ（講師：きだつよし），2011 年 11 月 3 日，於安田女子短期大学

④<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　おしゃべりなからだⅠ（講師：ほうほう堂　新鋪美佳・福留麻里）2012 年 3 月 13 日，於安田女子短期大学

⑤<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　おしゃべりなからだⅡ（講師：ほうほう堂　新鋪美佳・福留麻里）2012 年 9 月 19 日，於安田女子短期大学

⑥<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　リラックスとコミュニケーションⅧ（講師：きだつよし）2012 年 11 月 16 日，於安田女子短期大学

⑦<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　おしゃべりなからだⅢ（講師：ほうほう堂　福留麻里）2013 年 6 月 9 日，於安田女子短期大学

⑧<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　はじめてのオイリュトミーⅠ（講師：桑原敏郎）2013 年 9 月 16 日，於安田女子短期大学

⑨<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　リラックスとコミュニケーションⅨ（講師：きだつよし），2013 年 10 月 10 日，於安田女子短期大学

⑩<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　リラックスとコミュニケーションⅩ（講師：きだつよし）2013 年 10 月 11 日，於安田女子短期大学

⑪<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　リラックスとコミュニケーションⅪ（講師：きだつよし）2013 年 11 月 23 日，於安田女子短期大学

□<u>廿日出里美</u>，ワークショップ　おしゃべりなからだⅣ（講師：ほうほう堂　新鋪美佳）2013 年 11 月 26 日，於安田女子短期大学

６．研究組織

(1)研究代表者

廿日出里美（HATSUKADE　SATOMI）

安田女子短期大学・保育科・教授

研究者番号：４０２４８３２３